

## ヴィゴツキーの『教育心理学講義』に学ぶ(2)

—— 現代の子どもの発達心理学上の問題についての一考察 ——

皆川直凡

(キーワード: 小1プロブレム, ギャング・エイジ, 中1ギャップ)

### I. 問題と目的

本論文は、皆川(投稿中)の冒頭で紹介した「ヴィゴツキーを読む会」において、『教育心理学講義』の第3章と第9章を講読した成果をもとに、現代の子どもの発達心理学上の問題について考察することを目的として執筆された。第3章のタイトルは『教育の対象, メカニズム, 手段としての本能』(ヴィゴツキー, 1926a)であり, 第9章のタイトルは『子どもの年齢的発達と社会的行動』(ヴィゴツキー, 1926b)である。これらのことから合わせて読むことにより, 現代の子どもの発達心理学上の問題について考察することができると考えた。具体的には, 現代における発達心理学上の諸問題を取りあげ, 上記の2つの章で概説されているヴィゴツキー理論によってどのように考察しうるかを検討し, 問題解決の糸口を探る。ここでは, 下記の3つの発達心理学上の問題を取りあげる。小1プロブレム, ギャング・エイジ, 中1ギャップの3つである。

#### 1. 小1プロブレムとその要因

##### 1) 幼児期の発達の特徴

幼児期の発達の特徴は, 大きく分けると3点があげられる。1点目は, 運動技能や言語能力の高まりである。幼稚園などでの経験を通して, 運動技能や言語能力が高まってゆく。2点目は, 思考が直観的で自己を基準にしていることである。ピアジェ(Piaget, J.)のいう前操作期にあたり, 論理的思考の適用範囲が限られている(ピアジェ, 1964)。また無生物にも自分と同じように生命があると考えるアニミズム的な特徴をもっている。3点目は, 自我の芽生えと社会化である。乳児期には養育者とはほぼ一体であった子どもが, しつけに伴う強制や制止により, 自分が他者とは異なる存在で, 異なる意志や意図をもつということに気づき, それにこだわるようになる。養育者が援助の手を差しのべても, それが自分の意図と異なる場合には受け入れない。2~3歳頃のこの傾向は, 第1反抗期と呼ばれている。ルール遊びはできにくく, おもちゃの取り合いなどのトラブルが多くなる。意図と意図のぶつかり合いになってしまうためである。こうした経験を積み重ねる中で, 相手にも意図があることを知り, 相手の意図を尊重したり, 自分の意図を調節したりできるようになるとことから, 発達上の意義は大きい。幼児期の後半には, じゃんけんなどのルールを取り入れた集団での遊びができるようになる。

##### 2) 児童期初期の発達の特徴と小1プロブレム

児童期に入ると, 学校生活が始まり, 知性と社会性が急速に発達する。自分の意図がいつも通じるとは限らないことを知る幼児期や, 身体の成熟や自我の形成の過程で揺れる青年期と比べて, 情緒的に安定した時期であるとされている。しかし, ほんとうにそうであろうか。とくに, 幼児期から児童期への移行期にあたる小学校1年生から2年生にかけての時期は, 情緒的に安定しているとはいえないと考えられる。

学校において様々な経験をすることで, 人間関係の中心は, 家庭内の関係から友人との仲間関係へと移っていくが教育を通じて大人から価値やルールが伝達されることが多い。初期の頃は, 友人よりも大人に依存する傾向にあり, 学校では特に先生との関係が緊密である。先生の対応の仕方によっては, 学級が機能しなくなり, 学校への適応が困難になる。文部科学省の調査によれば, 学級が機能しなくなる原因のうち, 低学年で起きやすいケースとして, 小1プロブレムがあげられる。小1プロブレムとは, 小学校での集団生活に十分な準備のないまま入学してきて, 学校の求める行動に円滑に応じられない子どもたちにかかわる問題であり, 新保(2001)によって名付けられたとされている。こうした子どもたちの存在が学級崩壊を引き起こすケースが報告されている。たとえば幼稚園や保育所では一列に並んだり, いすに座って長時間話を聞くということを重視していないが, 小学校

に入ると暗黙の集団規範となる。小1プロブレムという現象に対しては、教師は就学前教育と小学校では集団規範が異なることを理解しておく必要がある。そして、就学前教育と小学校教育に携わる人々が相互理解を深めるとともに、段差が埋まるような緩やかな移行、たとえば、既存の集団規範を小学校1年生に最初からあてはめるのではなく、子どもたちが遂行可能な集団規範を考える必要がある。

## 2. ギャング・エイジをめぐる問題

### 1) 児童期における知性の発達

安定した情緒を基盤に、教育を受けて知的な発達が進む。ピアジェによれば7～8歳頃、具体的操作期に入る（ピアジェ、1964）。具体的な場面であれば、論理的に考えることができるようになる。たとえば、保存課題では、見た目に関係なく量は一定であるという解決が可能になる。保存の概念には、数、長さ、液量、体積、重さなどの領域があり、難易度が異なる。体積や重さの保存は、児童期中期でも困難である。

児童期後期から青年期前期（小学校5年生から中学校3年生ぐらい）にかけて、思考もそれまでとは違った特徴をもつようになる。具体的な場面では論理的に考えることができなかつたのが、現実には体験できない抽象的な課題についても、論理的に考えることができるようになる。ピアジェはこの時期を形式的操作期と呼び、論理的な思考の最高の段階と考えた（ピアジェ、1964）が、青年期後期（高校生ぐらいの時期）に入っても到達しないケースもあり、また教科や領域によって発達の程度や速度が異なるともされている。

### 2) 児童期における社会性の発達とギャング・エイジ

小学校入学時から3年生ぐらいまでかけて徐々に移行していく。子どもの発達上の一時期を表す心理学用語として、ギャング・エイジがある。國枝・古橋（2006）などによれば、一般的には、児童期の半ば過ぎ、小学校の中学年から高学年ぐらいの時期の子どものことで、典型的な発達の特徴から、そのように呼ばれている。親から少しずつ離れ、特定の仲間との絆を深める、という特徴をもつ。この仲間関係は数人から十数人の同性の集団で、非常に絆が強く、休み時間や放課後などはいつも同じメンバーで行動する。同年代の子ども同士でグループを作り、大人がいないところでさまざまな遊びをしたり活動したりするのが楽しい時期である。この時期については、秘密基地という言葉を用いて語られることもある。大人の多くは、親に内緒で友だちと、近所の空き地に秘密基地を作って遊んだ思い出をもつであろう。まさにその時期がギャング・エイジなのである。

秘密基地を作りたくなることは、子どもが将来自立するための心の準備であるといえる。親が用意したとおりでいいという生活がずっと続けば、いつか困ることになる。同い年あるいは近い年代の仲間と一緒に考えたり、行動を起こして自分たちだけの居場所を作ったり、自分たちだけで何かを考えたり計画したりすることは、大人になるうえでとてもたいせつなことであり、大人になるまでの準備の芽生えのようなものである。子どもの発達とともに自我が形成され、これまで親が絶対的存在だったのが、仲間から良い面も悪い面も影響を受けやすくなり、親の言うことを聞かなくなったり、口答えをしたりするようになる。つまり、親にとっては成長に喜びを感じる一方で、心配や不安、親子関係の変化などに戸惑う時期でもある。まさにこのあとの思春期、青年期に入っていく前段階として、親子双方にとって、自立へのスタート地点となる重要な時期であると考えられる。

### 3) ギャング・エイジ集団の喪失とその問題点

最近、ギャング・エイジ集団ができにくくなっているとされ、いくつかの原因が考えられている。少子化もその一つであろう。遊び場の減少、ゲーム機など個人的遊びの道具の普及、放課後の塾通いの増加も、子どもが他者（仲間）の必要性を感じる機会を少なくする原因と考えられる。さらに、子どもが犠牲となる事件の多発により防犯の必要性が増すなど、集団で活動したくてもできない環境になっているということもある。

少子化は、きょうだい関係を十分に経験できないということを意味する。きょうだい関係はギャング・エイジ集団をつくるための準備的経験である。小学校に入ると、子どもは親と子という縦関係の生活に加えて子ども同士という横関係の世界を経験するようになる。きょうだいの間には、時と場合によって、縦関係と横関係の両方が営まれる。気心の知れたきょうだいの間で縦横両関係を取り混ぜて経験することが、やがて、他人との間で集団を形成し、運営していく力のもとになるのである。かつては、隣近所の子どもたちが血縁関係や年齢を超えて交わり、支え合って生きる風土があった。たとえば、年長の子やできる子が手本を示す、手伝う、助けるということ、ルール遊びにおいて年少の子には例外を認めることなどである。しかし、こうした風土も失われつつある。

子どもたちはギャング・エイジ集団の中で互いに励まし合ったり助け合ったりし、自分たちだけのルールをつくってそれを守っていきこうとする。大人の居ないところで同世代のグループで行動し人間関係を経験することで、

競争したり協力したり、ルールも自分たちで作っていく。そうした経験のなかで、思いやること、我慢すること、責任を果たすこと、人付き合いの仕方、けんかをしたときの仲直りや仲裁の仕方など、将来生きていくうえで欠かせないことを学んでいく。ギャング・エイジ集団が過度に閉鎖的・秘密的なものであると問題が生じるが、他者集団の中でルールを守り、個々人が責任を果たしながら活動したり良い人間関係を保つための心のコントロールをするという面に目を向ければ、それは実社会の縮図であるといえる。向社会的な行動ができるようになるためのもとになる経験をしているとも考えられる。このような経験があまりできないと、さまざまな面で精神的に不安定になる思春期以降に影響を及ぼす可能性もあるといわれている。ギャング・エイジの時期に人間関係を学ばないまま思春期を迎える子どもが増え、友だち関係がうまくいかなかったり、自分の感情をコントロールできないということにつながる危険性があるということも指摘されている。

社会生活を営み始めるこの時期に仲間どうしの絆の強い集団に身をおいた経験は、やがて、より広い社会へと巣立ち、異なる価値観もある程度受け入れることのできる、真の意味での社会性を身につけるための心のよりどころとなると考えられる。仲間内だけの絆の強い集団に身をおく時期が遅れ、青年期の中期以降にずれこむと、さまざまな問題を起こすことになりかねない。

### 3. 中1ギャップとその要因

#### 1) 中1ギャップとは

6年間の小学校を終えた子どもたちは、中学校という、別の学校に進学する。中学校に入ると、通学する学校の校舎が変わり、教職員の構成も変わる。富家・宮前(2009)などによれば、中1ギャップとは、小学校を卒業して中学1年生になったときに新しい環境に馴染めないことから、不登校やいじめが起こったり、授業についていけなくなったりする現象のことである。常に不安を感じる、何事に対してもネガティブに考えてしまう、といった症状が出る生徒もいるという。中1ギャップを生む要因は、小学生から中学生になったときの、下記のような環境の変化が大きいと考えられている。

#### 2) 中学校への進学がもたらす「環境の変化」

第1に「役割期待が変化する」ということである。中学校の入学式では校長先生から「ここはもう小学校ではありません」という趣旨の挨拶が行われることが多く、これに続けて「いっそうの主体性が求められる」、「将来の進路選択に向けた勤勉性が期待される」といった話がされることも多い。中学校は小学校と比べて制服など身なりや持ち物に対する約束事が徹底しており、それらを遵守することが求められる。

第2に「生活環境が変化する」ということである。中学校生活が始まると、体面で苦勞する生徒が少なくなっていく。小学校より登下校に時間がかかったり、課外活動に追われたりして疲れが溜まり、体調不良に陥ることもある。また、環境の変化によるストレスで腹痛や頭痛を訴える生徒もいる。一般に「部活」とよばれる課外活動への参加は、「中学校でもっとも楽しみなこと」としてあげられることが多いが、「最大の楽しみ」がしばしば「最大のストレス」に転じることもあることを知る、最初の経験になる子も多い。

第3に「学習内容が難しくなる」ということである。小学校での学習は、できるだけ児童全員が身につくように復習をしながら授業が進んでいく。しかし、中学校では学習内容が幅広くなるため、進み方が早くなる。多くの教科では、理解や問題解決のためにより抽象的な思考の力が要求されるようになる。復習を自分で行わなければ授業についていくのが難しくなり、自主学習の習慣も求められる。その結果、学力の個人差が大きくなる。中学校になると学期毎に定期テストが実施される。校内での順位を公表する学校もあり、評価が厳格かつ明確になることでショックを受ける子も少なくなっていく。

第4に「先生との距離が遠くなる」ということである。小学校では担任の先生が常に教室にいて、ほとんどの教科を指導するが、中学校では教科ごとに先生が変わり、担任の先生と接する時間が少なくなる。そのため、悩みや不安があっても、担任の先生に相談しにくいことがある。

第5に「子どもどうしの関係が変わる」ということである。同年代の集団の構成にも変化が起きる。中学校に入ると、他の小学校を卒業した子と一緒にクラスになる。新しい友人関係を築くのに苦勞する子も多く、ささいなことで友人関係のトラブルに発展するケースもある。小学校では上の学年の子とも仲良く楽しく遊んでいたのに、中学校に上がると先輩・後輩という関係になって戸惑う子もいる。上級生たちは、皆からだが大きく、大人びている。小学校時代の縦割り班などでやさしくしてくれた上級生とは明らかに異なる雰囲気をもつ。上下関係から成る縦社会を経験することは、社会に出たときに役立つといわれるが、部活などで先輩・後輩の関係に理不

尽なルールがあると、ストレスを感じてしまうこともある。

### 3) 思春期（青年期前期）の発達的特徴と中1ギャップ

中学校への進学は、本人にとってうれしく、保護者にとっても喜ばしいことである。しかし、それ自体がストレスになることもある。現代のストレス学説では、「大きな変化であれば、たとえ快の変化であってもストレスになる」と考えられている（ラザルスとフォルクマン、1991）。中学校進学というストレスの反応の蓄積やそれをきっかけとした悪循環の先に、中学校での不登校やその前段階としての学級不適応、いじめ、各種の心の不調の問題がある。仲間との距離感がうまくとれずに孤独と不安で集中力を失い、友人関係だけでなく、教師や親との関係、学業成績にまで影響する。こうしたさまざまな不安定さの中で、心を閉ざす傾向、原因不明の体の不調を訴える傾向、反社会的な行動という一時的な解消にしかならない問題行動を起こすケースもある。

## 4. ヴィゴツキー理論への期待

本論文では、小1プロブレム、ギャング・エイジ、中1ギャップという、幼児・児童期から青年期前期にかけての3つの発達心理学上の問題をとりあげているが、これらはそれぞれの時期の問題と考えられてきた。しかしながら、これらの問題は個々の時期だけの問題ではないようにも思われる。たとえば、ギャング・エイジの前後を小3ギャップ、小5危機としてとらえる向きもある。また、中学校での活動に意欲が失われてしまって非社会的な傾向あるいは反社会的な傾向が繰り返されるようになる中2の夏休みから秋期の問題、そして、進路選択により不安定になる中3の時期などもある。つまり、ある時期に特有な問題としてとらえるだけでは限界があり、子どもの心の発達過程についてより総合的な視点でとらえる必要があると考えられる。ヴィゴツキーはその視点をもっていたと考えられる。ヴィゴツキー理論が上記を貫く発達心理学上の問題に対して、どのような示唆を与えているのかについて、標題の書の第3章と第9章の記述内容を中心に検討し、教育対象としての子どもの心理学的特徴について考察することを本論文の目的とする。

## II. 子どもの興味と遊びの心理学的意義

ここでは、標題の書の第3章『教育の対象、メカニズム、手段としての本能』（ヴィゴツキー、1926a）を参照しつつ考察をすすめる。本章では、まず教育のメカニズムとしての本能に着目し、「本能は複雑な肉体的欲求と結びついた強力な衝動であり、活動への刺激である」（p. 40）とする。「このことから、教育においては、衝動の自然力が十分に利用されなければならないということは明らかである」（p. 40）と述べる。そして、「本能は巨大な自然力であり生体の自然的欲求の表現である」（p. 41）とし、「環境の条件が変化すると本能との不一致と不調和が生じる」（p. 41）と論じる。さらに、「本能を環境条件とふたたび調和するように導くことが教育の課題となる」（p. 41）と説く。小1プロブレムや中1ギャップにおいても、環境条件との不調和や不一致が問題となっており、これらの問題の解決には、環境条件との調和を導く教育が欠かせないと考えられる。以下では、「子どもの興味」、「遊びの心理学的意義」の各節の記述を中心に、考察する。

### 1. 子どもの興味を活かした教育

#### 1) 興味—本能の現れの基本的形態—

同書の第3章第4節の冒頭には、「子どもの時代における本能の現れの基本的形態は興味であり、興味は多面的意義をもつ」（p. 49）という記述があり、続いて「子どもの興味を正確に考慮して構成することについての要求は、教育の基本的即である」（p. 49）と論じられている。これらにつづく段落の記述に心理学的法則についての記述があり、子どもに何かの活動をさせようとする教師は、その前に活動への興味をもたせ、活動への準備状態が整うように配慮しなければならないという趣旨のことが述べられている。

#### 2) 子どもに興味をもたせる教育

次の段落では、子どもに興味をもたせる方法についての記述があり、教育者は、重要な危険を考慮する必要があるとしている。授業中に地理の授業で手品のようなことをしてみせたり、歴史の授業でジョークを語ったりするといった「副次的手段で呼び起こされた興味は、私たちに必要な活動を助長しないばかりか、妨げるものでさえある」（p. 50-51）と述べている。そして、その副次的手段に類するものとして、罰や褒美をあげ、「ほんとう

の興味を見いだしたり、いつも興味が脇にそれず、何か他のものにすりかわることのないようにすることは、きわめて複雑な心理学的課題なのである」(p. 51) と述べている。「内面的には子どもの行動をまったく変えない」(p. 51) と論じており、用語としては直接用いられていないが、「内発的動機づけ」(鹿毛, 2013) の重要性を指摘する論述であると考えられる。

続いて、「子どもが十分にもっている自然的興味を私たちが子どもに身につけさせたい興味へと転化させる心理学的原理を常に守る必要がある」(p. 52) という心理学的観点から、教育が目的とする新しい興味と、単なる教育手段としての興味を区別することは正しいという論が展開され、教育が目的とする興味の例として、生活上の仕事、科学、労働といったものへの興味が例示されている。内発的動機づけには、「好きだから」「たのしいから」といった類のものだけでなく、「自分のためになるから」「役に立つから」といったタイプのものも含まれるという、現代の自律的動機づけ理論(櫻井, 2017)に通じる論述である。

### 3) 興味形成の一般的心理学的原則

対象が私たちに興味を起こさせるための条件として、私たちがすでに知っている何かと関連があるものであること、新しい活動形式を内に含むものであることをあげている。「その対象や現象と生徒との私的な関係を打ちたてるためには、その学習を生徒自身の仕事とする必要がある」(p. 52-53) と述べている。そして、「子どもの興味を通して新しい子どもの興味へ。これが原則である」(p. 53) と論じている。発達の最近接領域理論(ヴィゴツキー, 1935)に関連する論述であり、現代の「主体的学び」(皆川, 2015)に通じる議論である。

この場合、もっとも重要な援助となるのは労働教育の方法であり、「それは子どもの作ること、行動することへの自然的好みに基づいており、すべてのテーマを一連の興味ある行為に、それも自分自身の活動から経験する満足のような、子ども自身のものではない興味ある行為に、考えることを可能にする」(p. 53) とし、学習と生活との結合の重要性を強調している。

標題の書の第3章第5節の冒頭には「子どもの興味の発達は、子どもの一般的生物学的成長と緊密に結びついている」(p. 54) という記述があり、つづいて乳児期から青年期までの発達の特徴が示されている。本論文の対象年齢である児童期は「興味が身近な環境を越えて広がることで特徴づけられる」(p. 55) とされ、思春期は「自分自身への高まる興味によって特徴づけられる」とされている。

本論文の「I. 問題と目的」では、小1プロブレムの年代の発達心理学的特徴として、具体的な場面であれば論理的に考えることができるようになることをあげたが、標題の書の第3章第4節および第5節の記述は、そうした思考の発達に関して、教育の手がかりとなる議論であるといえよう。また、中1ギャップの年代の発達心理学的特徴として、具体的な場面では論理的に考えることができなかつたのが、現実には体験できない抽象的な課題についても、論理的に考えることができるようになるが、発達速度の個人差が大きく、自主学習の習慣の形成が求められると論じたが、こうした思考の発達を円滑に進めるための教育に対しても、示唆に富む議論であると考えられる。

### 4) 子どもの興味を活かした教育に関する著者らの取り組み

著者の研究室では、ヴィゴツキー理論にもとづく教育実践をいくつか試みてきた。2018年度大学院授業「教育実践フィールド研究」における取り組みもその一つである。取り合わせによる創作を用いた俳句教育実践である。俳句は、子どもたちの様々な能力を養うことができる魅力的な教材である。俳句の鑑賞を行うことで、言葉の持つ豊かさを感じ、鑑賞力や想像力を養うことができる。また、俳句の創作を行うことで、豊かな表現力や語彙力を育成することもできる。そのため、俳句を題材とする教育実践研究が多く行われてきた(たとえば、皆川・横山(2013))。この取り組みでは、俳句創作の入門期にある小学校4年生の発達水準を考慮し、よりよい入門学習のあり方を探究した。俳句は、その形式によって、季語だけに意識を集中し、その状態や動作を詠む「一物仕立て」と、季語とそれとは離れた情景を組み合わせて詠む「取り合わせ」の二つに分けられる。「取り合わせ」は「一物仕立て」に比べ、高度な観察力、想像力が要求されず、創作が行い易いと考えられる。そこで、本研究では、「取り合わせ」による創作学習について実践をおこなった。

協力校の教頭先生によって行われた、俳句の形式と季語についての2時間の授業に続いて、本研究グループが下記に示す2時間の授業を実施した。(1)「取り合わせ」の指導の授業(①俳句知識の復習、②日記作り、③俳句の種探し、④季語選び、⑤取り合わせによる俳句の創作)。(2)自由創作の授業(①取り合わせについての復習、②俳句の自由創作、③創作した俳句の清書。自由創作時の俳句を分析したところ、直接的な感情表現を使用せず情景から感情を読み取らせるような深みのある俳句が多くみられた。取り合わせによる俳句では特にその傾向がみられた。言葉選びの独自性に優れているものも多く、季語と俳句の種がよりよく引き立てあっていた。擬態語や

擬声語、より高度な想像力や言語力が求められる比喩表現を用いた俳句もあり、思考力の発達に個人差が生じる時期であることが垣間見えた。

その後、上記の時間に作られた俳句を題材として、級友や大学院生との交流、相互鑑賞をおこなった。互いの作品に対して、感想を書く活動である。ギャング・エイジの子どもたちがふだんはあまり話さない友だちと交流する機会となった。また、互いを思いやったり、考えの違いを越えて心を交わしあう機会にもなった。ヴィゴツキーのいう発達の最近接領域をめぐる交流になったと考えられる。

## 2. 遊びの心理学的意義に着眼した教育

### 1) 遊びの心理学的意義とその発達

標題の書の第3章第6節には、「将来の活動への学校、準備としての遊びの生物学的意義は、人間の遊びの研究においても完全に確認された」(p.57)という記述がある。続いて、いつも遊ぶ存在である子どもの遊びは大きな意味をもっているとし、「子どもの遊びは、正確に子どもの年齢や興味と対応しており、必要な習熟や能力の形成をもたらす要素を備えている」(p.57)と述べている。つぎに、年齢にともなう遊びの変化についての記述がある。

遊びの第一のグループ(文脈から判断して、おそらく乳児期の遊び)としてあげられているのは「個々の物との遊び、がらがら、物を投げたり、搦んだりする遊び」(p.57)であり、そうした遊びをするなかで、子どもは「見たり聞いたり、搦んだり、押しのけたりすることを学ぶ」(p.57)としている。

次の時代の遊びとしてあげられているのは、「隠れたり、逃げたりすること」(p.57)であり、「自分を環境のなかで移動させ、その中で自分の位置を定める能力の形成と結びついている」としている。文脈から判断して、幼児期の遊びを指しているものと思われる。「私たちのほとんどすべての基本的な主要な反応は、子どもの遊びの過程で形成される作り出されたものだ」(p.57)とさえ述べている。また、ここでは子どもの模倣の意義も強調されている。「子どもは、大人が自分にしてみせることを積極的に再生し、習得する」(p.57)という論述である。つづいて、人形遊びの例をあげ、「人形と遊ぶなかで少女は、生きた子どもにすることではなく、自分を母親と感ずることを学ぶ」(p.57)と述べ、「遊びのなかに持ち込まれる模本の諸要素については、このように見る必要がある」(p.57)としている。そして、そのことが複数の側面を積極的に習得することを促し、子どもの内的経験をその方向で組織すると論じている。

つぎに、いわゆる工作遊びがとりあげられ、「私たちの運動の正確さ、精密さを教え、たくさんのきわめて価値ある育成を形成し、私たちの反応を多様に増やす」「一定の目的を立て、私たちの運動をその目的に実現に向けて組織することを教える」(p.58)と述べている。文脈から、児童期前期から中期にかけての遊びが思い浮かぶ。そして、その役割が以下のように語られる。「このようにして、活動の計画性・合目的性、運動の調節、自分の期間を制御し、統制する能力の最初の授業は、これらの遊びである」(p.58)。これを「これらの遊びは、最初の遊びが内的経験を組織したように、外的経験の組織者・教師なのである」(p.58)と言い換えている。

最後に、第3のグループとして、条件付きの競技と呼ばれる遊びをあげている。「純粹の条件規則から生まれ、それと結びついた行為は、遊びの高等学校のようだ」、「行動の高次の形式を組織し、行動のかなり複雑な課題の解決と結びついており、競技者は緊張、気転、機知、さまざまな採用や力を組み合わせた共同の作業を要求する」、「社会的経験の偉大な学校である」、「自分の行動を他人と調整する」、「子どもの生きた・集団的经验」等々(p.58)と説明されていることから、児童期中期の後半から青年期初期にかけての遊びが想像される。

### 2) 遊びの心理学的意義と社会性の教育

第3のグループの遊びは、本論文の「I. 問題と目的」で検討したギャング・エイジ集団の遊びに相当すると考えられる。上記に続く段落で、家庭と社会との関係についての論述があることから、そのように考えた。「家族は、子どもの心に深い、しっかりした社会的結びつきをつくりだすことができるが、きわめて限られた規模のものである」とし、社会性の教育の場としての学級・学校に着目している。社会的環境の拡大によって解決される、その課題は「社会的コミュニケーションの育成と琢磨」(p.59)であるとし、教育の目的は、「小さなグループの壁を乗り越え、素早く巧みに社会的判断を行う一定の創造的能力を形成することにある」(p.60)と述べている。たまたま電車と一緒にあったような簡単な社会関係に対するものとして、「深い愛情と友情の形態で発生するきわめて複雑な社会関係」をあげ、それに至るまで、「人間は自分と他人との関係の発見には真の創造的能力を必要とする」(p.60)というのである。

これにつづく「子どもを新しい状況に投げ込み、新しい条件に従わせることによって遊びは、子どもに運動の社会的調整を無限に多様化させ、他のどの教育分野もできないような柔軟性、弾力性、創造的能力を教える」(p. 60)などの言葉の端々にも、ギャング・エイジ集団での秘密基地を舞台とする子どもの遊びと、その経験を基盤として、閉鎖的ではなく、多様な価値観をも受容する、真の意味での社会性の獲得に向けた発達とそれを促す教育についてのヴィゴツキーの考えをうかがい知ることができる。本章の結び近くにある以下の記述が、このことを端的に物語っている。「いいかえれば、遊びは、行動あるいはエネルギー消費のシステムを一定のルールに従わせる合理的、合目的、計画的、社会調整的活動である、」(p. 61)、「遊びは子どもの自然的労働形態であり、将来の生活を準備する子どもに固有の活動形態である。」(p. 61)。

### Ⅲ. 子どもの発達と環境への適応

ここでは、標題の書の第9章『子どもの年齢的発達と社会的行動』(ヴィゴツキー, 1926b)を参照しつつ考察をすすめる。本章では、まず適応の概念に着目し、教育学では、子どもの生活や行動の環境に、子どもを適応させることが教育の最終目的であると語っていると述べる。本章第1節「適応と環境」(pp. 195-196)には、下記の趣旨のことが書かれている。考察にあたり、環境への適応は多様な性質をもち得ることと、子どもの年齢的発達によって、環境に対する対応の程度が異なることについて考える必要があること、いずれにおいても、社会的な観点からの検討を要することである。第2節「幼児と環境」(pp. 197-199)には、主としてフロイトの心理-性的発達理論が紹介されている。「幼児的行動から大人の行動への移行は、常に悲劇的である」(p. 199)として、「フロイトはそれを快楽原理と現実性原理との闘いと称している」(p. 199)と述べている。児童期(とくにその初期)は大人の行動への移行がはじまる時期であることから、小1プロブレムが生じる原因の一つがこの節において説明されていると考えられる。第3節「現代の環境と教育」(pp. 199-202)については、当然のことながら、そこで扱われている「現代」が本論文の「現代」とは異なるため、参照が困難であるが、「理想的な教育の実現は、適確に方向づけられた社会的環境を基盤とするときのみ可能であり、したがって教育の根本問題の解決は、社会的問題が完全に解決された後になるにちがいない」(p. 201)という論述、それにつづく「人間という素材は、正しく組織された社会的環境の下では、無限の可能性をもっている」(p. 201)という論述は、今日の教育にも通じる内容であると考えられる。第4節「社会的行動の現実的形態」(pp. 202-206)では、「人間の生産活動は、集団的性格を特徴としており、常に社会的力の組織化を、その発生の予備的契機として必要としている」(p. 202)、「人間の教育の性格は完全に社会的な環境に規定され、その社会的環境の下で人間は成長し、発達していく」(p. 203)等々記述されており、現代における小1プロブレムおよび中1ギャップの各問題には、知性ならびに社会性の発達上の問題が深く関わっていることを示唆している。以下では、第5節「子どもの動揺と発達」(pp. 206-211)の記述にもとづき、これら2つの問題について考察する。

#### 1. 幼児期から児童期にかけての発達における葛藤と小1プロブレム

標題の書の207頁から208頁にかけて、ヴィゴツキーの考えによる幼児期から児童期にかけての発達心理学的特徴が述べられている。記述の主要部分を抽出すると以下ようになる。「子どもは自分の身内の環境の影響、要するに、身近な人々が彼に対して果たす役割の影響を受ける」(p. 208)。つづく段落で、「だから母親は、子どもにとってまさしく最初の社会的環境なのである。(中略)要するに、幼児期の全期間は、諸々のできごとが山のように生じる時期であり、子どもは歩くこと、話すこと、運動することを学び、環境の中で最初の定位を行う時期である。この幼児期は6、7歳まで続く」(p. 208)。

続く段落では、「ここで、ある種の危機、成長の停滞が訪れる。それに続いて児童期である7歳から13~14歳までの新たな質的に異なる時期が、始まっている。一般には思春期と呼ばれる13歳~14歳までが児童期に含まれていることになる。この時期は、子どもを環境との直接的な関係に引き入れる。(中略)子どもの行動形態は複雑になってゆき、周囲との環境との新しい関係に入る」と書かれている。これらの記述は、幼児期から児童期へと移行する狭間(6、7歳頃)で、子どもは環境との関係において相当な葛藤を経験することを言い表している。少し後(p. 209)には、子どもたちの反抗壁は、しばしば7~8歳の子どもたちに鋭い形で現れるという趣旨の論述もある。これらは、小1プロブレムが生じる原因を指摘した論述であるとみることができる。

## 2. 児童期から青年期にかけての発達における興奮性と中1ギャップ

標題の書の208頁では、児童期の終わり（13～14歳）の発達の特徴が下記のように表現されている。繰り返しになるが、今日の区分で言えば、思春期にあたる。「この時期は、すべての心理学者たちが、子どもの生活の中での悲劇的時代であるとそろって認めている性的成熟の時期で終わる。急激な変化があらゆる点に明白に認められる」（p. 208）として、声変わり、体つきに変化などの特徴を述べている。

続く段落では、「この時期はまた、高揚した興奮性とごちなさによって特徴づけられる。すなわち、自分が環境に不適應であると絶えず意識しているかのような様子を特徴としている。だから、この時期は、ほんとうの意味での危機的年齢である」（p. 209）。これらは、中1ギャップが生じる原因を指摘した論述であると考えられる。

## IV. 総合考察

本論文は、ヴィゴツキーの『教育心理学講義』を講読した成果をもとに、現代の子どもの発達心理学上の問題について考察することを目的として執筆された。具体的には、現代における発達心理学上の諸問題のうち、小1プロブレム、ギャング・エイジ、および中1ギャップの3つをとりあげ、標題の書の第3章（ヴィゴツキー、1926a）と第9章（ヴィゴツキー、1926a）で概説されているヴィゴツキー理論によってどのように考察しうるかを検討し、問題解決の糸口を探ることをめざした。

本論文の「I. 問題と目的」では、小1プロブレムの年代の発達心理学的特徴として、具体的な場面であれば、論理的に考えることができるようになることをあげた。これを受けて「II. 子どもの興味と遊びの心理学的意義」では、同書第3章の第4節から第5節にかけての記述を検討し、小1プロブレムの時期の思考の発達に関して、教育の手がかりとなる議論が行われていると考察した。また、「I. 問題と目的」では、中1ギャップの年代の発達心理学的特徴として、具体的な場面でしか論理的に考えることができなかつたのが、現実には体験できない抽象的な課題についても、論理的に考えることができるようになるが、発達速度の個人差が大きく、自主学習の習慣の形成が求められると論じた。同書第3章の第4節から第5節にかけての記述を検討し、中1ギャップの年代の思考の発達を円滑に進めるための教育に対しても、示唆的な議論であると考察した。

条件付き遊びは、本論文の「I. 問題と目的」で検討したギャング・エイジ集団の遊びに相当すると考察された。ギャング・エイジ集団は、深い愛情と友情の形態で発生するきわめて複雑な社会関係としてとらえられると考察された。子どもを新しい新しい条件に従わせることによって、遊びは、子どもに運動の社会的調整を無限に多様化させ、他のどの教育分野もできないような柔軟性、弾力性、創造的能力を教えるといった言葉の端々から、ギャング・エイジ集団での秘密基地を舞台とする子どもの遊びと、その経験を基盤として、閉鎖的ではなく、多様な価値観をも受容する、真の意味での社会性の獲得に向けた発達とそれを促す教育についてのヴィゴツキーの考えをうかがい知ることができると考察された。

本論文の「III. 子どもの発達と環境への適応」では、同書の207頁から208頁かけての記述を検討し、ヴィゴツキーの考えによる幼児期から児童期にかけての発達心理学的特徴が述べられていると考察した。これらの記述を要約すると以下ようになる。この時期の子どもは身近な人々の環境、すなわち身近な人々が彼に対して果たす役割の影響を受けて、歩くこと、話すこと、運動することを学び、環境の中で最初の定位を行う。この幼児期は6、7歳まで続くが、ここで、ある種の危機や成長の停滞が訪れ、児童期に入ると新たな質的に異なる時期が始まる。この時期、子どもは環境との直接的な関係に引き入れられ、行動形態は複雑になってゆき、周囲との環境との新しい関係に入る。これらの記述について、幼児期から児童期へと移行する狭間（6、7歳頃）において子どもは環境との関係において相当な葛藤を経験することを言い表していると考察した。子どもたちの反抗壁はしばしば7～8歳の子どもたちに鋭い形で現れるという趣旨の論述もあることから、これらは、小1プロブレムが生じる原因を指摘した論述であるとみることができると考察した。

同書の208頁では、児童期の終わり（13～14歳、一般的には思春期と呼ばれる）の発達の特徴が表現されていると考察した。これらの記述を要約すると以下ようになる。この時期は、すべての心理学者たちによって、子どもの生活の中での悲劇的時代であると認められている性的成熟の時期で終わる。急激な変化があらゆる点に明白に認められ、その例として、声変わり、体つきに変化などの特徴があげられる。この時期はまた高揚した興奮性とごちなさによって特徴づけられ、自分が環境に不適應であると絶えず意識しているかのような様子を特徴

としていることから、この時期は、ほんとうの意味での危機的年齢である。これらは、中1ギャップが生じる原因を指摘した論述であるとみることができると考察した。

## 引用文献

- 鹿毛雅治 (2013). 躍動する主体 — 欲求論からのアプローチ — 学習意欲の理論 — 動機づけの教育心理学 — 金子書房 (pp. 157-231)
- 園枝幹子・古橋啓介 (2006). 児童期における友人関係の発達 福岡県立大学人間社会学部紀要, 15, 105-118.
- ラザルス(Lazarus, R. S.)とフォルクマン(Folkman, S.) (1991). 本明寛・春木豊・織田正美 (監訳) ストレスの心理学 実務教育出版
- 皆川直凡 (2015) 21世紀の新しい学びに関わる理論と実践を結ぶ研究, 教育心理学年報, Vol. 54, pp. 57-70
- 皆川直凡・横山武文 (2013). 子どもの発達の最近接領域を考慮した学習指導の在り方の検討 — 俳句をとおした感動・共感体験による季語への関心・知識の深まり —. 鳴門教育大学授業実践研究, Vol. 12, pp. 19-27
- ピアジェ(Piaget, J.) (1964). 滝沢武久 (訳) 子どもの精神発達 思考の心理学 (pp. 9-95) みすず書房
- 櫻井茂男 (2017). 学習意欲に関する理論 自律的な学習意欲の心理学 (pp. 81-98) 誠信書房
- 新保真紀子 (2001). 「小一プロブレム」に挑戦する — 子どもたちにラブレターを書こう — 明治図書
- 富家美耶子・宮前淳子 (2009). 教師の視点からみた中1ギャップに関する研究 香川大学教育実践総合研究, 18, 89-101,
- ヴィゴツキー(Vygotsky, L. S.) (1926a). 柴田義松・宮坂琇子 (訳) (2005). 教育の対象, メカニズム, 手段としての本能 教育心理学講義 (pp. 40-61) 新読書社
- ヴィゴツキー(Vygotsky, L. S.) (1926b). 柴田義松・宮坂琇子 (訳) (2005). 子どもの年齢的発達と社会的行動 教育心理学講義 (pp. 195-211) 新読書社
- ヴィゴツキー(Vygotsky, L. S.) (1935). 土井捷三・神谷栄司 (訳) (2005). 発達の最近接領域と知的発達のダイナミズム 「発達の最近接領域」の理論 — 教授・学習過程における子どもの発達 — (pp. 61-66) 三学出版

## 謝 辞

本論文を執筆するにあたり、「ヴィゴツキーを読む会」の先生方のご協力を得ました。横山武文先生、清水愛先生、森友子先生、斉藤佳菜先生の各位である。ご芳名を記して感謝の意を表します。また、本論文中で紹介した教育実践を実施するにあたり、横山武文先生ならびに清水愛先生にお世話になるとともに、当時のゼミ生（鳴門教育大学大学院2019年度修了生、松田紘昂さん、吉田健人さん、劉晶晶さん）の協力を得ました。合わせて感謝の意を表します。

# **Learning from Vygotsky's "Educational psychology lecture"(2): Consideration for Contemporary Depelopmental Psychological problems of Children**

MINAGAWA Naohiro

The author considered for Contemporary Depelopmental Psychological problems of Children, being based on learning from chapter 3 and chapter 9 of Vygotsky's "Educational psychology lecture". Firstly, the author took up the first-grade probrem in elementary school, gang age, and the first-grade gap in junior high school, as contemporary depelopmental psychological problems of Children. Nextly, The author discussd relationship between these problems and Vygotsky's theory. The consideration in this paper demonstrated that Vygotsky's theorygave a clue of those depelopmental psychological problems of children.